第１２回共助社会づくりを進めるための検討会議事録

令和元年９月２６日

東京都庁第二本庁舎３１階特別会議室２３

市川座長

それでは、定刻になりましたので、ただいまから第１２回共助社会づくりを進めるための検討会を開催いたします。

では、配付資料について、事務局、お願いします。

山﨑地域活動推進課長

それでは、配付資料ですけれども、お手元にお配りさせていただいています。第１２回共助社会づくりを進めるための検討会の次第が一番上にありまして、２枚目に資料１といたしまして、検討会の設置要綱、資料２といたしまして検討会委員の名簿、その間に座席表が入っております。資料の３番から今回の議題でございますが、資料３番は第１１回検討会、それから、第１回、第２回仕組みづくり専門部会の議論の整理ということで、Ａ４、横１枚のものをつけさせていただいております。２ページ目から「２０２０年ボランティア活動の継続と参加者の裾野の拡大に向けて」というものが１つ。それから、「ボランティア活動へ誘う様々な要因」という絵が１つ、それから、「個人がボランティア参加を発意する上での実態・留意事項」、「ボランティアに関する主な人々」、「ボランティアに関与する人々の関係性」、「興味関心と連動した、双方向性のあるオープンなネットワーク」まで続きまして、８ページ目として資料の４番で「仕組み」の中心としての機能を果たす取組について、右下にページがあります。９ページ目、「仕組み」の全体像ということで絵があります。

それから、１０ページ目が仕組みのテストケース事業の①といたしまして、ボランティア情報ポータルサイトでございます。これは右上のほうにございますが、委員・オブザーバー限りの資料ということで配布させていただいています。こちらは、これから実は業者さんを決めて委託なりを出していきますので、今の段階では、委員・オブザーバー限りということでさせていただいております。１１ページ目も同様でして、こちらはテストケース事業②としてのイベントについてでございます。

資料はこちらまでで、この後は、参考資料なのですが、参考資料１というのを振るのを

忘れているのですが、東京２０２０大会ボランティアのマッチング状況ということで、２０１９年の９月１２日時点で、組織委員会のほうで大会ボランティア、フィールドキャストのマッチング状況ということで出されている資料をつけさせていただいております。こちらはトータルの人数というのは入っていないのですけれども、今回、申し込まれた方々の、最終的にフィールドキャストとして言い方が正しいかわからないですけれども、採用された方々の属性、こちらのほうが入っております。少し見ていただくと、性別としては女性が６１％、男性３９％ということで、日本国籍を持った方、そうではない方の比較があるのですけれども、ほぼ同じというところでございます。

ちなみに、括弧書きが応募時点のものでございます。年齢層としては５０代の方が一番多いです。それから、４０代、６０代が多いというところで続いています。国籍に関しましては、日本国籍が８８％、日本国籍以外の方が１２％という形で活動していただくということになってございます。括弧書きを見ておわかりのように、最終的にマッチングの中では日本国籍の人が増えているというところです。そんな状況でございます。２ページ目は、それぞれの希望されている日数ですとか、分野、場所が記載されております。こちらも数字は出ているんですけれども、複数回答ですので、総数はわからないという状況でございます。

もう１枚めくっていただいて参考資料の２なのですけれども、東京２０２０大会都市ボランティアの応募者数についてということで、こちらは３１年１月３１日現在のものでして、議会でオリンピック・パラリンピック及びラグビーワールドカップ推進対策特別委員会というのがあるのですが、そちらのほうで出されている資料でございます。都市ボランティアのほうの募集ですけれども、都市ボランティア３万人のうち、２万人程度を募集したところ、応募者数が３万６，６４９人おります。２番の応募状況のところです。応募者の構成としては、男性３５％、女性６３％、年代別に見ていただければ１０代が一番多いというところです。５０代と続いています。国籍につきましても、日本人９４％、国内在住の外国人が４％で、海外在住の外国人が２％、申し込みがあったというところでございます。

裏側を見ていただきますと、下に参考として大会ボランティア、フィールドキャストの募集状況というのが入っております。募集人員８万人に対して２０万４，６８０人の応募があったというところで、この２０万４，６８０人のうち、先ほどの資料の方々が採用といいますか、ボランティアとして活動していただくというところにつながっております。

続きまして、チラシを１枚入れさせていただいております。「外国人おもてなし語学ボランティア」育成講座というチラシですけれども、こちらは大会関連ボランティアということで、生活文化局のほうで講座を行っているボランティアでございます。町中で外国人観光客の方も含めて、例えば道に迷っていたり、電車の乗り方がわからなかったりというのを見かけたときに、積極的に声をかけましょうというボランティアさんで、特にいつ何時、どこでというような管理はしていなくて、講座を終了して、皆さんで、町中で活動してくださいということでお願いしているものでございます。

その外国人おもてなし語学ボランティアの属性が次の資料に入っておりまして、目標、育成実績と書いてありますが、最終的には５万人が講座を修了する目標を立てておりまして、今現在といいますか、昨年度現在、４万５，８３３人の方が講座を受けていただいておりまして、今年度中に５万人を達成するという状況でございます。こちらの方の中で登録をしていただいている方、登録が男女比でいきますと女性６７％、男性３０％。年代別でいきますと５０代が１９％、４０代が１８％ということで、ここが一番多いということになります。あと、男性、女性の年齢比もそちらに出しておりますが、ほぼ一緒というところでございます。

あとは、今後のスケジュールについてという紙をつけさせていただいておりまして、あと参考資料の４といたしましては、皆様方にご協力いただきましたアンケートにつきましてまとめたものをつけさせていただいております。

資料については、以上でございます。不足等ございませんでしょうか。大丈夫ですか。では、座長、済みません、お願いします。

市川座長

では、定数の確認をお願いします。

山﨑地域活動推進課長

本日の出席委員でございますが、１２名の出席をいただいております。共助社会づくりを進めるための検討会設置要綱第６に定める定足数のご出席をいただいております。本検討会が有効に成立しておりますことをご報告いたします。

市川座長

では、今回は設置要綱第９条により公開とさせていただきます。それとともに、異議がなければ検討会の議事録につきましても公表させていただきたいと思いますが、ご了解いただけますか。

（「異議なし」の声あり）

市川座長

どうもありがとうございました。それでは、お手元の資料に基づき、議事を進めたいと思いますが、今回、２つの議事、議題がございます。まず、最初について、東京２０２０大会を契機としたボランティア活動の継続と裾野拡大に向けた理念について、事務局から説明をお願いします。

山﨑地域活動推進課長

それでは、ご説明させていただきます。冒頭で済みません、修正で最後から２番目の資料で、スケジュールについて先ほど少し見ていただいたと思うのですが、当初のスケジュールですと、ここの本日の検討会において中間のまとめをお示しして皆さんに議論していただくというスケジュールになっていたのですが、部会のほうでももう少し議論したほうがいいというようなご意見もいただいておりますので、この検討会で中間まとめに向けた、先ほど座長からもありました理念について共有いただきつつ、この後、部会のほうで中間のまとめをまとめていくという作業に入らせていただきたいと思います。

それでは、議題のほうの説明をさせていただきます。資料の３番、１ページ目を見ていただきながら、その後ろの資料について見ていただければと思っております。資料の３番のＡ４横のこちらですけれども、今までの検討会、それから、部会で議論していただいたものの整理ということになっております。上の枠は最初にうちのほうから説明させていただきましたけれども、今回の検討していただく事項ということで、ボランティア活動の継続と、それから、参加者の裾野拡大に向けた取組についてどうしたらいいかというところでございます。この中で、前回お話しした中でターゲットの想定をしたほうがいいだろうと。やみくもに誰でも彼でもということでいくと、検討するのにまとまらないので、ターゲットを決めるということで、大会関連ボランティアで、先ほども少しご説明させていただきました、おもてなし語学ボランティアを含む大会関連ボランティアを対象として検討し、それを次第に拡大していくという形にしたらよろしいのではないかというご意見をい

ただいているところでございます。

１枚後ろについています東京２０２０大会以降のボランティア活動の継続と参加者の裾野拡大に向けてというところで、ボランティア活動についてと共助社会づくりについてというのをつけさせていただいております。これが一番冒頭で、検討会の最初にご説明させていただいたところの趣旨のところでございます。ご参考いただければと思います。

それで、１枚目に戻るのですが、部会の中で議論をいただいたところをまとめたもので、ここの中間まとめに向けた、もしくはこの裾野拡大に向けた取組に向けた理念のところが、こちらのＡからＦのところでまとめさせていただいております。まず、１つ目、Ａですけれども、多様な興味・関心への対応ということで、大会をきっかけに興味を持った人にさまざまな多様な出口を紹介する。それから、Ｂとしては、活動のモチベーションを与えることが大事ではないかということで、活動を通じてギフトという言い方ですけれども、ありがとうとか、ご苦労さまというような声をかけてもらったりとかいうところで、ボランティアの方がまた次につながっていくのではないかという話ですね。

それから、Ｃのところでは、情報の一方通行ではない双方向性の確保というところで、また後ほどお話をさせていただくのですが、こちらに絵をつけさせて、なかなか見えづらいと思うのですが、左側の絵が第１回目の検討会のときに私どもからお示しさせていただいた、左側にボランティア情報がありまして、それが右側のボランティアをやる人に流れていくという、これをベースに考えていただくというところで始めたのですが、この情報の一方通行では駄目だよねという意見をいただいた次第でございます。その右側は後ほどまたご説明させていただきます。それが先ほどの資料のＣのところにも入ってきておりまして、ボランティアを実際にやった方々の情報とか、そういうものが返ってくることで団体にも利益になりますし、ボランティアをやる人にもいい情報になるのではないかというご意見をいただいてございます。

それから、Ｄに行きまして、オープンかつシンプルなネットワークということで、ネットワークをつくってはいくのですけれども、それが複雑なネットワークであると入ってくる人はほんとうに入らないので、オープンであり、しかも、シンプルでなければいけないというようなご意見をいただいているというところでございます。それから、Ｅのところです。丁寧なコーディネートというところで、コーディネーターさんたちもいらっしゃるところではあるのですが、ボランティアをやる人に対しては、コーディネートをしっかりとするところも大事であるというところがありまして、特に、ここにあるのですけれども、

興味がある人と団体をつなげるためにコーディネーターさんがちゃんと話を聞いてあげて、それに基づいてどういうところがいいよと紹介してあげるというのが次に続いていくというような話ですとか、単純にシステム、ウェブ上だけで何とかできる話だけではない。「だけではない」ではないですね。それで話が終わるものではないというところがご意見をいただいているところと、Ｆに関しましては、既存組織・団体の連携というところで、例えばボランティアを募集している団体さん同士がつながることで、ボランティアさんに対する集め方といいますか、募集の仕方、それから、ボランティアさんに活動してもらうもらい方も含めてなのですけれども、そういうものが共有できることによって、より広がるのではないかというところもありますし、今までつながっていなかった中間支援組織さん同士でもいいのですけれども、そういう方々もつながることで、より広いネットワークができていくのではないかというようなご意見をいただいているというところでございます。

時間の都合上、それ以降の資料は事前にお送りさせていただいて、目を通していただいているという前提で、それぞれのものを図示したもの、細かく書いたものというところで資料をご用意させていただいているというところでございます。ざっと言うと、３ページ目が興味・関心のところでして、ボランティアをやりたい、もしくはボランティア活動をしたいというところの要因というのは、単純に１つだけではなくてさまざまな要因があります、ということを示しております。４ページ目に関しましても同じでして、きっかけ、動機をつくるに当たってもいろいろな側面から動機というものはあります。きっかけというのはありますので、それが個人的なものから社会的なものまで様々ありますというところを書かせていただいております。

それから、５ページ目は、一方通行ではないというところの考え方の中で、このボランティアに関する人たちの属性といいますか、こういう人たちが主体になって動いていきます、というところを示させていただいておりまして、この５ページ目の人たちが関係性を持つとどうなるか、というのが６ページ目に示させていただいておりまして、一方通行で組織、団体、ボランティアを必要とする主体が中間支援団体を経由して個人に情報が行くだけではなくて、さまざまなパターンが、その逆ももちろんありますし、団体と直接つながるケースもあるというところを示させていただいております。

７ページ目は、それをさらにもう一歩、こちらはボランティア団体、ボランティアを集める団体さんはちょっと置いておいて、個人の人たちがどういうつながりをするのかというような絵をかかせていただいているのですが、議論の中でもあったのですけれども、Ｉ

Ｔを活用したものだけではなくて、現実のリアルな場というものも必要だろうという意見もありまして、ただ、それはリアルな場としての、例えばイベント的なものというのをここに書かせていただいているのですけれども、このイベント的なものはイベント的なものとしてやって、ＩＴはＩＴでやって、ではなくて、それがまた連動しなければ広がっていかない、つながっていかないというご意見をいただいているので、それを絵にしています。ですから、個人も、それぞれいろいろな人、専門家もいれば未経験者もいればというところがこの２つのものを使ってつながっていくというイメージでございます。

ここまでが理念でございます。資料の４以降は、また後ほどというところです。ほんとうに雑駁でわかりづらい説明なのですけれども、以上でございます。

市川座長

毎回、若干イメージが変わってくるところがあるのは、皆様方のご意見を入れて多様性が大事だとか、双方向が大事だとか、いろいろなご意見をお伺いしたところでございまして、それをできるだけ反映させようということで、このような図になって、まだ完璧だということは言えません。ただ、今後、中間報告に向けてさらに皆さん今日の意見をいただいて精査し、それをそれぞれの方にまたお配りして意見を伺いながらブラッシュアップしていくという作業をしたいと思っています。それだけに多様なこのメンバーですので、それぞれ視点があるから、それを活用していかなければ広がりは持てないという認識を持ちますので、どうぞ忌憚のないご意見をいただければと思います。

では、中間のまとめに向けた議論を進めていきます。では、どうでしょうか。ご意見がございましたら、おっしゃっていただければと思いますが、いかがでしょうか。どなたでも構いません。手を挙げていただければ、マイクを持ってまいります。どうぞよろしくお願いします。

どうぞ。

渋谷委員

これまでの議論、大変わかりやすく整理していただいたかなと思っています。こちらのＡからＦまでを出していただいたのと合わせて、各、こういうふうに１枚物にまとめていただいているのはすごくわかりやすいなと思います。ただ、もしかしたら、私たちはこの

議論をしているフェーズにいるので理解できるのですけれども、第三者に伝えていく上での、何か導入といいますか、読ませ方というのは、もしかしたらリード文とかが必要なのではないかなと実感をしています。また各論については、気づいたらご指摘させていただければと思います。

市川座長

ありがとうございます。１つの概念を整理して理念を整理し、１つの青写真ができた上で、それを少しわかりやすくしていく。まず固めていく作業が必要だと思いますけれども、全ボラの関係でいくと高橋さん、どうですか、これは。

高橋委員

ちょっと見によくできているなという感じはします。ごめんなさい。あまり考えていなくて、多様な入り口もつくるんだろうなとか、多様な出口と言ったので、やる気のない人もというか、もともと動機づけはないけれども、やれる人というのも入れる入り口があったらいいなとか、何となく見て思っていたぐらいです。

市川座長

そういう意味では、全国のボランティア、市民活動センターとしても、今後、これを積極的にサポートしていただきたいので、ご意見、教育関係ではいかがですか、先生。

杉渕委員

学校現場からの立場でお話し申し上げますと、ここにある活動へのきっかけですとかになりますけれども、２０２０大会にももちろん募集している生徒もいますけれども、その前の、きっかけというところになると、本校の生徒もここの前向きなきっかけに対する、４ページにありますけれども、これの左下のメリットの側面が非常に高くて、例えば本校は単位認定していますけれども、単位が欲しくてやる生徒はいませんが、何か履歴書に書けるかもしれないとか、学校全体でやっている、学年全体でやっているボランティアについては、ほぼ強制的に参加させられることもあります。でも、そういうものが、とにかくやってみることが一番大事で、その契機は何か自分にとって得があるとか、きっかけは何でもいいんじゃないかなということは思っています。

あともう一つ、やるに当たって、視点が全然違うのですが、今、常識なのですけれども、ボランティア保険みたいなもので保障されているという安心感があるとまたとても安心して取り組めるというところもあるかと思います。済みません、参考になるかわかりませんが。

市川座長

ボランティア保険が出たけれども、そこら辺の議論は東ボラの方、どう？そこら辺は、今、こういう形で進めていらっしゃる？

長谷部東京ボランティア・市民活動センター副所長

ボランティア保険は、むしろ、全社協の方からも発言していただいているかと思いますけれども、保険自体はできるだけ簡単にというか、今の加入の方法というのが少し煩雑というのもありますし、実際に今、千葉の災害でもインターネットで加入を、ボランティア保険、入ってということが進められてきていますので、実際、１年間有効なボランティア保険をいかに何か簡単にというか、いろいろな方にボランティアに行く間に入ってもらうとか、そういうような工夫は少しずつ進めていく必要はあるかなと思っていますし、今回、災害のところでは全国社会福祉協議会のほうがそういう形で進めていますので、少しずつ変わってきているかなとは思います。

高橋委員

今おっしゃったとおりで、基本的にボランティア保険って地元の社協に来なければいけないところなんですね。働いている方々については土日とか、あるいは夜間ということでしか来られないと思うのですけれども、なかなかそういうような利便性に沿っていないところがあったのですが、今回、災害を切り口にしてウェブ加入というのを始めて、試行的に入れてみているというところでございます。

市川座長

ということは、入っていただく、つまり、オリパラの後に活動する際には、そういうような保障する仕組みも開発しておかないと、みんな躊躇してしまうということにもなるかと思いますが、足立さん、大学生は、どう？例えば４ページを見て、個人がボランティア

参加を発意する上での実態・留意事項とか、内発的な側面で個人的な発意とか、魅力と感じる側面、それから、メリットづくりの側面と社会的側面といった、いわゆる幾つか分けて、この間の議論でもあったので４つに分けましたけれども、大学生というのはどうですか、ここら辺に当てはまりますか。

足立委員

すごく前回にも申し上げたような丁寧なコーディネートの部分とかも盛り込んでいただいて、すごく上手くまとめていただいてありがとうございます。今のお話でどういったことが言えるかわからないのですけれども、私たちの大学のボランティアセンターとして学生を送り出すときに、ここに書いていただいているような内発的な意欲を高めるとか、例えばそのボランティア活動がどういった意味があるのかというのを事前に伝えるとか、あるいは終わった後に振り返りの場面を設けて、学生がちゃんと役に立てたという実感を持てるように振り返りをするとか、そういったこともすごく大切だなというふうにここのところを見て思っていたのですけれども。

もう一つ、これを見て可能であればアプローチしたいなと気になったところがあって、我々送り出す側もすごく丁寧にコーディネートして送り出さないといけないと思うのですけれども、学生が続けてもらうためには、すごく魅力的なプログラムというか、活動が地域の中にあることというのもすごく大事だなと思って、学生を受け入れてくださった側のところでも学生の思いをくみ取ってくださって、丁寧にコーディネートしてくださるところが必要だなと思ったので、何か受け入れ側の団体とか施設とかにＰＲできるような、そういうボランティア、受け入れ側としてもボランティアコーディネーション力が必要なのだ、大切なのだというところをわかっていただいたりとか、その力を高めてもらうためにアプローチすることができないかなというふうに思いました。

市川座長

ありがとうございました。そういう意味では、要するに受け入れ側、仲介型、それから、送り出し側という、それぞれの連携とか、それぞれにきちっとコーディネートして、もしくは体制を整えていくということが大事だというふうに理解してよろしいですね。それがないと、一方だけでやっても続かないと思います。

ほか、いかがでしょうか。高木さん、どうぞ。

高木委員

ありがとうございます。１ページのところにコーディネーターの必要性というところが記載をされているのですけれども、多分、東京のボランティアセンターだけではなくて、東京都でいくとやっぱり各市町村の、区市町村のボランティアセンター等の役割は大きいのかなとも思っております。ただ、体制的、社協、それからあとＮＰＯがやっているところもあるのですけれども、どこもコーディネーターの体制が十分かというと、そうでもないというところもありますので、あと東ボラさんも頑張っていろいろ研修の機会とかつくっていただいているので、なるべく参加できるようにはしているのですけれども、この中間支援のところでコーディネートをする職員の力量を上げていかなければいけない。先ほど足立委員からもありましたけれども、中間のところというのは、実は企業さんはよくわからなくて、ボランティアさん、欲しいんだけれどもとかと言われたときに、きちんと答えられるだけの力量を持てる職員というものがいないと厳しいのかなと思っています。

なかなか正規の職員で全てが雇用されているわけではなかったりするので、そうすると非正規、嘱託であったりだとかというふうになると、年数的にたってくると、そろそろ正規に行きたいからやめますとかといって、経験値の積み上げがずっと続くわけではないというところが現実的なところであるので、そうするとどうしてもある一定行くとドンと下がってみたいな時期が何年かに１回やってきたりするので、そこのところでコーディネーターの力量アップというところでは、そこを人的な部分が担保するというのはなかなか大変なのかもしれないのですが、最低でもそれの力量を上げるための研修の場面という部分をつくって、今でもあるのですけれども、継続的にとか、行きやすい環境をつくるだとかという形でつくっていただけたらいいなと思うことが１つ。

それから、この１ページの一番上の四角の中、まずは大会関連ボランティアということで、東京都でもこの万の単位での都民、市民の方々がご参加をいただいているわけですけれども、それが継続するというふうになると、東京都全域で、じゃあ、その人をというのはなかなか多分厳しいのかなと。そうすると、その方がお住まい、もしくは働いている、もしくは在籍されている学校のあるエリアでの活動という部分が想定されるのかなとなると、その辺の東京都で集めたボランティアさんの情報が各市町村のほうへ出すことが可能なのかどうか。そこの部分が情報を市町村と共有ができるのか。ただ、これに関してはやっぱり個人情報の取り扱いの問題があるので、申し込みをされたボランティアさんにこの

情報を各市町村、お住まいの、もしくは在籍されている会社及び学校の市町村のあるボランティアセンターに情報提供していいかどうかというところを「はい」か「イエス」――あ、「はい」か「ノー」かというところでチェックを――「はい」か「イエス」だと、どっちもオーケーになってしまうので。

済みません、私、時々ある団体で使うので、返事は「はい」か「イエス」どっちと聞くんですけれども、そんなような形で情報提供が各市町村、少しでも降りてくると、調布には今まで接点がなかったけれども、東京都さんのほうに申し込んだら、新しい人材がこんなにもいるんだ。例えば１００人の単位で、単純計算すると１００人の単位でいる話になってしまうので、そういう方々の情報をいただけると、市内での活動にそれを活用できるのではないか。もしくは東京都のほうからあったときに、調布で持っている方の情報をこういう方がいますよなんていうこともできるのではないか。その辺、個人情報の取り扱いのところはいろいろ考えなければいけないところがあると思うのですが、そんなことができたらいいなと思います。

市川座長

ありがとうございました。

その点、同じように鈴木委員、いかがですか。

鈴木委員

私も今、高木委員さんがお話したのとほぼ同じ意見を持っています。実はこの表を見ながら、３万何千人応募して２万人ですか、実際に活動。その落ちた人たちの思い、もしかしたらやりたい、ボランティアをやりたいと思って手を挙げた、この人たちに対してはどうするんだろう。ほんとうはその人たちの受け皿もあったらいいなと正直思いました。それと、同じように、じゃあ、うちの地域からどのぐらいの人が申し込んだんだろうか、どのぐらいの人がこの体験をしてくれるんだろうかと思うと、やはり体験した方々にぜひ私たち地域のボランティアセンターでは出会いたいし、その人たちにぜひ例えば学校や何かで体験をお話ししてもらうとか、いろいろなプログラムが地域の身近な場所で多分用意できるかなと少し思いますので、ぜひそういう連携が図れるといいなと思います。

それと、コーディネーターの件も全く同じ意見なのですけれども、先ほど受け皿の部分のやはり受け入れ側のコーディネート力というのもとても大事で、だんだん中間支援の私

たちのようなボランティアセンターのコーディネーターと、ほんとうはいろいろな施設なり、いろいろな受け皿になるところにもコーディネーターが置かれると、より活動した人たちが、ここに書いてあるようなモチベーションが高まったり、あるいは自分のやっている活動がきちっと評価されている、またやりたいというところにつながっていくのではないかなと思います。

あともう一つ、ボランティア保険、インターネットで入りやすいというのはとても大事だと思う反面、私たち地域のボランティアセンターでは、ボランティア保険に入りにきて初めて、あ、この方はボランティアをやるんだ。被災地に行くとか、初めてそこで出会うことがあります。ふだん、日常的に社会福祉協議会にかかわっているボランティアさんは、ボランティア保険だけではないところでつながるのですけれども、ボランティア保険ではもっと幅の広い、いろいろな活動をしている方々に出会います。なので、インターネットで申し込めるのと合わせて、ぜひほんとうは地域のボランティアセンターに来ていただけるという仕組みもあると、私たちにとってはとてもいい出会いになっていますので、そこも大事にしてほしいなと思います。

市川座長

ありがとうございました。

１つ、２番目で言った東京で集めた人への情報提供もしくはその情報を地域が持てるのかどうか。落選した人への対応というのは挙げられたけれども、そこら辺はやっぱり、難しいんでしょうね。どう？

山﨑地域活動推進課長

補足といいますか、今、多分、都市ボランティアのほうで２万人募集で３万６，０００人なんですけれども、２万人募集で３万６，０００人で１万６，０００人が落ちるということではなくて、多分、３万６，０００人応募していただいているんですけれども、フィールドキャストと一緒に両方申し込んでいる人とか、実際は当日になって来れない人とかという人もいる、いわゆる歩留りとかも考える中で、基本的に３万６，０００人の人全部にお願いをする方向という話は聞いています。まだこれからいろいろ決めていくので、今の段階ではまだなんですけれども、というところがあるので、ここの人たちは基本的に落ちる人はいないという考え方のほうが今の段階ではいいのかもしれないです。仮に落ちた――落ち

たと言っていいのかわからないのですけれども、せっかくですから、そういう情報をというところもありますし、組織委員会さんのほうは、そういうことは考えられてやられているという話も聞いています。というところです。

あと、その情報をどう流せるかということは、個人情報を渡すことは多分、不可能だと思います。個人情報を取るときの条件がやっぱりこの大会ボランティアをやる、都市ボランティアをやるために募集していますし、私どものほうでやっているおもてなし語学ボランティアもこれだけに使うというところでやっていますので、逆にこういう人に対してどういう情報を渡していくか、それぞれの地域の情報を渡していくかというところが大事になってくるのではないかなと。そこに目を向けていただく。

今回、部会のほうでもいろいろ議論いただいているのが、オリンピックで集まってきた人たち、オリンピックがあるから、東京であるから東京のために何かしたいという人たちがどう地域に目を向けてもらえるのだろうかというところを考えていったほうがいいのではないかということが部会の中でも議論いただいているところです。

市川座長

そういう意味では、結局、その得た情報を回すというよりも、そこの部署で得て正当に確保している、そこのその人に対してどのような情報が適切なのか。そのほかにつながっていく情報が必要かということがずっと議論の前提だと思うのですけれども。

ただ、あと学校でコーディネーターをするとかいう場合、小原さんにもお聞きしていいですかね。例えば教育庁の関係でもやっぱり、学校でボランティアコーディネート、ボランティアの先生、いらっしゃる。よくいろいろなところではね。だから、そういう意味では、学校で受け入れ側、学校にボランティアに来たいという人とか。

小原委員

学校にボランティア。

市川座長

そう。何かそういうのが結構あると思うんですね。子供たちを何かお手伝いして、何かちょっとさせていただけないかという、今までで議論というのがあったりして、そうするとその分、また学校にボランティアコーディネーターとして行って、そこの子供たちをつ

なぐような、外から来たボランティアコーディネーターみたいな、そういうことも考えられると思うのですけれども、どうなんですかね。コーディネーションというと、学校教育の中では。

小原委員

今おっしゃられた話をうまく捕まえられていないかもしれないのですけれども、学校の中でわかりやすい例でいいますと、部活動の指導に関して例えば野球とかサッカーとかでもわかりやすい競技かと思うのですけれども、その指導力のある先生が、たまたまいない学校というときに、地域のそういうスポーツが得意な人に部活動の指導を協力してもらうみたいなケースはあります。今、それは組織的に部活動指導員という仕組みで、大会の引率もできるような仕組みもだんだんに整備してきてやっているというのがあって、その外部の力を学校も教育活動の中に参加していただいて、参加してくださる方は、その持っている能力を十分に生かす場が学校というところで手に入る、という仕組みは、さまざまな形で今充実させようとしていまして、その辺の受け入れ側の学校としてのコーディネーションというのは、大体校長、副校長といった学校管理職が受けとめて、そこを進めているというのが実態です。

ですので、校長、副校長の立場で見たときには、学校というこの場にこういう外部人材がいたらいいのになとは思うものの、それに適した人がなかなか見つからない。今の部活動指導員など典型なのですけれども、やってくれる人がなかなかいなくてみたいなのはよく聞く話でして、そうすると、そのコーディネーションというもののレベルというんですか、あるいはコーディネーションの程度というのがあって、そういう学校の受け皿側としてのコーディネーションする人に対して、つなぐコーディネーションみたいな、そういうコーディネーションという一言で説明し切れなくて、その段階がそこに出てくると、もう少しそれぞれの立場の人が自分の必要としているものが見えてきやすくなるのかな、というのが今の話の中で思ったところです。

市川座長

ありがとうございます。

そういう意味では、学校が何を求めているか、人材、例えば後で言いますが、ＩＢＭなどは教えに行って、いろいろなところにボランティアで行っている。そういうプログラム

があるわけですよ。そしてまた、そこで逆に空き教室があれば、東京はあんまりないけれども、あればサロンをやっているところもあって、さらにボランティアがいて、一緒に子供たちが高齢者のサロンに参加しているとか、いろいろあるので、そういう部分での開発も両先生に、小原先生と鈴木先生とご助言いただきながら、学校も、いわゆる受け入れ側としてもあるし、派遣型という派遣していく側もあるし、両方あるだろうと。それに対して広げれば、そこに対してやろうとする業務、多いんじゃないですか。大津さんはどうですか。

大津委員

ＩＢＭ、大津です。今のお話で企業側からの視点でコメントさせていただきます。そういう意味では、４ページにありましたメリットづくりのところで、左下で企業を入れていただいていますけれども、ボランティア休暇で持続させる動機をつくっていくとか、会社が推進するというのはあるのですけれども、現場での実感としては、どちらかというと左上、内発的動機を持っている社員というのが最近増えていると思っています。新入社員や若い人たち、なので、仕組みというよりも、できるだけそういう機会や情報を若い社員にどう提供していけるかというところがポイントになるかなと思っています。

その中で弊社、教育へのボランティアに力を入れていまして、中学、高校への出張授業であるとか、今、教育庁さんとも連携して工業高校の支援等もさせていただいています。そこにも社員の応募、すごいたくさんあるんですね。なので、会社のプログラムでやっている社員もいますし、自分で勝手に知り合い、友達が先生だからといって手伝いに行っている社員もいます。なので、そういう思いを持っている、弊社以外にも企業の中にはたくさん人がいると思うので、そういうところにおっしゃっていただいたように学校側のニーズとか、うまくマッチできる情報を伝えられるような仕組みがあるといいかなと感じています。

市川座長

そういう方も例えばボランティアに応募している方もいらっしゃるだろうし、そういう方たちも受けとめるような学校教育との連携とか、それは１つの視点として挙げられると思います。そのほか、いかがですか。吉田さん、この間、説明に上がって、そしてこれは少しお話ししたとおり、吉田さんの意見も取り入れてあるんですけれども、この辺の理念

型とか図はどう思われますか。ＮＰＯセンターとして。

吉田委員

日本ＮＰＯセンターの吉田と申します。今回から前任の引き継ぎで参加させていただいています。よろしくお願いします。

すごく完成度が高いといいますか、あまりコメントするところもと思いながら拝見していました。強いて言うなら、先ほども議論になっていましたけれども、１ページ目のＥのところでコーディネートが大切だというのは同感す。私の立場からすると、やはり受け入れ側のリテラシーというのはすごく気になるところで、私も幾つかの団体とおつき合いする中で、ボランティアの受け入れをされているところとかも見るのですけれども、ほんとうにちょっとしたところの声かけとか、ちょっとしたかかわり、手持ち無沙汰にしないとか、そういうところですごく差が出るなと思っています。そこをどう高めるのかというのはすごく重要なポイントだろうと感じました。

もう一つのコーディネーター、つなげるコーディネーターですけれども、ここはインターネットがこれだけ広がってきている時代を考えると、ボランティアセンターの窓口にわざわざ行ってボランティアを探す、「何かボランティアはないですか」という探し方は減っていくのではないかなと思っています。むしろ、コーディネーターの人は受け入れ側と一緒にプログラムをつくるとか、それを発信するところにもっとかかわっていただけると、よりボランティアの方を捕まえやすいのではないかなと感じました。

もう一つが、このページで大会関連ボランティアをまずは対象としようということで設定されています。しかし、ここでまとまっているものは、いずれも重要なポイントではあるものの、割と総論になっています。この、「大会関連ボランティアにとってこの視点を落とし込むときにどうなのか」というのは、多分、次の議論としてあると感じました。そこのところがまだ私もイメージがつかないのですけれども、大会関連ボランティアに来た人にとって、この視点を落とし込むというところで、もう一段具体化する必要が次はあるのだろうなと感じました。

市川座長

ありがとうございました。それはある意味で提供する、情報を広げていく、そのためにも吉田さんからいろいろなＮＰＯセンター、いろいろ活動しているから、そこにくっつけ

ていけるような、海外であるとか、福祉だけではなくて、環境とか災害とかいろいろな、かかわっていける、モチベーションになるようなものをどう広げられるかということかと思いますので、これから吉田さんもぜひご助言いただきたいと思います。

吉﨑さん最後にどうですか。

吉﨑委員

吉﨑と申します。いろいろ皆様のご意見を聞いている中で、私もこの事前に資料をいただいた中で、先ほど高木委員さんかな、鈴木委員さんがおっしゃっていた、市町村への情報提供というようなことで、先ほど山﨑課長から個人情報の提供はなかなか難しいと。だから、そうすると、例えばですけれども、仕組みづくりになってしまうのかもしれないのですが、私はこの語学ボランティアも青梅市で会場を提供していまして、２００人ぐらい青梅市の中で受講されているという話は聞いています。この方たちに実際の活動の経験談みたいなのを市として講座を開いているんですけれども、市民活動団体向けに。そういうところでお話しいただけないかなと、おぼろげで思っていたのですが。

だから、逆にふと思ったのは、青梅市が東京都さんのところにこういう方を紹介ではないのですが、やりたいのでという申請というか、申し出をしたときに東京都さんがそういうふうに各市町村とかに派遣するようなつながりを持てる仕組みがあると、何かつながるのかなというふうに今ふと思ったところです。だから、その情報を我々行政と各市にボラセンがあると思うのですけれども、そこの連携は一応、保っているつもりなんですけれども、そことやっぱり大会に通ずるところの、まさしく情報の行ったり来たりがうまくできる仕組みがあるといいかなと少し感想で思いました。

市川座長

都というよりも東ボラかもしれませんね。

はい。国というよりも全社協かもしれません。それはそういうソフトな形で、先生、最後、いかがでしょうか。

山崎委員

皆様のご意見を上手にまとめていただいて、ほんとうにありがとうございます。４つほ

どあるのですが、まず１つは、送り出し側と受け入れ側という２つに分けているのですが、実は送り出し側と受け入れ側の間に、今日ここに参加されている方、中間支援組織なんですね。だから、中間支援組織が果たす役割と、それから、受け入れる側になる実際の活動団体とというふうに分けて考えてみると、まず送り出し側なのですけれども、非常に質の高いといいますか、自分でモチベーションがあって、そしてほんとうに正規のイベントに参加する非常に高揚感がある活動にご参加をされるという、この方たちのこのエネルギーとか、あるいはモチベーションとか、それから、活動に参加した体験を生かさない手はない。

生かさない手はないって変ですけれども、そこで終わってしまわないようにするためにどうしたらいいだろうかということだと思うのですけれども、最初に今回の参加者の中で、子供たち、１０代の子供たちの割合が高いですね。高い。２０％近くあるということは、この成長発達期のこの時期にこの体験をした子供たちというのは宝物だと思うんですね。そうすると、これが福祉協議なり、市民学習なり、あるいはいろいろな社会体験を生かせるように考えていくというふうなテーマ型だと思うんですね。それから、その人たちに、あるいは少し５０代というところに厚みがある。５０代って、人生の、ある意味では、これから人生の午後に入っていく、働き盛りなのだけれども、その先の人生を考えようとするって、そういう年代だと思うのですけれども、そうすると、できればその終わった後の研修か、あるいは今やっている最中だと思うのですが、ボランティア活動か市民活動というのは社会参加する。

そして社会の中で自分が一定の役割を持っていくという、そういう要素があるので、これは一過性のものではなくて、この体験を生かして次の人生の中で自分が会社人間である５０代の人はあるでしょう、学生という層があるでしょうし、主婦層もあるでしょうけれども、その中で次のステージに向かって市民参加していくというふうな人材へと向かって歩けるような研修が間に入るというのが、今多分、いろいろなノウハウとか活動の仕方とか、そういうやや技術的な、あるいはその中での参加のいろいろなプログラムだと思うのですけれども、この人生の体験として、これを生かしてほしいということが最初の入り口の中にまずモチベートされているということがとても大事なので、そこのところをやっていただければありがたいなと。

その子供たちなら子供たちが１つの市民として、市民的な教育というものを受ける入り口になったらばいいなと。それから、今、学校は、先ほど少し教育庁もおっしゃってくだ

さったのですが、新しい学習指導要領が変わって、そして今、学校応援団というんですか、杉並とかいろいろな、墨田方式とか何々方式ってなって、学校に応援団がつくられて、これは学習指導要領のおかげで、次のところには全部の学校をつくらなければいけないという時間のあれがありますよね。そうすると、その学校には、学校応援団の中にコーディネーターが配置されるということになっていて、コーディネーターがもう町田などですと２００人ぐらいいらっしゃるんですかね。というふうな学校の中にそういう変化が起こってきているので、この変化を生かして、そしてもし行けるのか行けないのか、この子供たちがそこの領域とはまた違う領域、つまり、地域の中につなぎ役になる人があると、その子供たちと学校の距離が違ってくるかもしれない。そこのところが私たちには見えないんです。

というのは、応援団をつくった学校が、あの学校がつくったから、うちはあのまねっこはしたくないとか、あのやり方はちょっと駄目だからやめたとか、そういういろいろなことが今、いろいろなコンフリクトが起こっているらしいということはわかったのですけれども、学校が今、新しい、１０年に１回の学習指導要領の中で、学校のドアがちょっと変化しているので、それは私は読み切れないので、どういうふうに考えるのかということがあると思うんですね。それから、中間支援組織としては、今、そこに入ってくださった方々の個人情報もあるのですけれども、それが間に入って受け入れ側、つまり、施設だったり、あるいはいろいろな場所がありますけれども、環境の団体だったり、いろいろなところが、その受け入れ側のほうに今度は人材がないということで、今、そういう例えばある老人ホームなどですと、特養の中にはボランティアコーディネーターが配置されているところと配置されていないところとあるんですね。

配置されているところはプログラム開発がすごく盛んにできていて、５，０００人から６，０００人ぐらいのボランティアが施設の中におられるということもあるんです。そうなってくると、その受け入れ先に一緒にこのすぐれた人材が、先ほどどなたがおっしゃった、吉田さんかな、参加型、来たプログラムに入っていただくというよりは、むしろ持っている風、あるいは持っている力というものが、そこを大きくしていけるような主体に変わっていけるように、一緒にプログラムをつくりましょうよ、一緒にそこを開発しましょうよという人材に変わっていってくれると、受け入れ側も大きく刺激されるし、始まったほうもただマッチングだけではなくて、そこを一緒につくりましょうというふうなプログラム開発をする流れが、今、吉田さんがおっしゃったように、かなり今厚みがついてきていま

すから、そういうふうな人材に例えば子供たちの提案だったり、高齢者の提案だったりができるような、そういう弾力のあるものにしていけたらば、やっている意味がついてくるのかなと思いました。

そして、今落ちた人の話がありましたけれども、体験することによって変わってくるので、そのやってくださった体験が受け入れ側も生かされるような、ここに入ってください、このプログラムに乗っかってくださいというよりは、むしろ、もう一つ先を考えたネットワークをつくっていくということによって地域も変わりますし、それから、活動者自身もある意味ではそれが自分の生き方になっていったりするので、その辺のことを十分に配慮した書きぶりになっていったらいいかなと少し思いました。

市川座長

どうもありがとうございました。

ある意味で、このコーディネートと書いてあるけれども、コーディネートのやり方を少し議論したほうがいいですね。多様な視点になって。それから、コーディネーターって誰という、これも少し議論しておいたほうが、いろいろなコーディネーターがいらっしゃるので、その可能性を広げることだと思います。それから、４ページのこのところの特に右側のところを少し、例えば内容の多様性にしろ、魅力と感じる側面を満たせるような内容にしろ、ここら辺、もう一度再検討してみるということが今までの意見を入れてやってみたらいいし、教育関係でもそういう動きがあるならば、それを取り入れて理由化していくことが可能ではないでしょうか。それが皆さん方にご助言いただきながら進めていければと思います。

では、次に、よろしいでしょうか。また中間報告案をつくりますので、その中でご意見ください。よろしいですか。１２月までに書面で少しチェックをお願いすることだと思いますが、では、次に仕組みについてに移りたいと思います。説明をお願いいたします。

山﨑地域活動推進課長

それでは、ただいまいただきました理念を前提に、仕組みをどうしたらいいのかというところを考えましたものが資料の４と絵のほうになります。どっちか、絵のほうから見ていただけますか。９ページのほうから見ていただければと思います。最初に話しましたけれども、当初は、こちらの後ろにあります左から右の情報の中の真ん中にあるのが、今回

考えるシステムという形でどうでしょうかということで提案させていただいたのですが、それでは何もうまくいかないというところがありまして、では、議論いただいた中で全体像ということで図示してみたものがこちらというところになります。こちらにボランティアネットワークシステムということを書かせていただいているのですけれども、単純なウェブシステムだけではなくて、先ほど言いました現実のイベントですとか、それから、広報的なもの、それを動かしますというか、それを進めていきますと協議会というものが１つのシステムとして真ん中にありまして、それがそれぞれ周りにいろいろな団体さんが入ることで全体が動いていくのではないかということで議論をいただいているというところでございます。

そのそれぞれ、真ん中に入ります４つがどういうものかというのが８ページにお戻りいただきまして、８ページのほうでそれぞれ書かせていただいている。仕組みの中心としての機能を果たす取り組みということで、１つは協議会というもので、協議会といってもガチガチの何か検討する場というところではなく、全体の仕組みと連携するボランティア中間支援団体さんですとか、在住外国人支援団体などの情報の共有とか意見交換の場というところで、この全体、どういうふうにしたらいいのというような意見をいただくような場というふうに考えているところでございます。

イベントのところで、交流の場というところで、こちらのほうでは活動のモチベーションの維持向上ですとか、情報の提供、それから、受けるほうもそうですね。共有するところ、あとはきっかけづくりを行うための交流の場というイメージでございます。ウェブシステムのほうですけれども、ボランティアの参加希望者、中間支援団体、ボランティア団体等がさまざまな方法でこのウェブシステムの中で関わっていくような、ウェブ上で中心となるようなプラットフォームというところでございます。

あと、広報というところでは、この仕組みを効果的に運営するための周知ですとか、あとはボランティア気運の醸成、この仕組みをどう講ずるのではなくて、ボランティア気運を醸成するための広報が必要であろうと。この４つが真ん中に入りまして、それぞれの団体さんとうまくつながっていくことで、このボランティアの気運醸成ですとか、活動、裾野の拡大等につながっていくのではないかという議論をいただいているというところでございます。

これでも何となくイメージがわかりづらいところもありまして、１０ページ、１１ページをごらんいただければと思います。こちら、本日、委員・オブザーバー限りということ

でお示しさせていただいております仕組みのテストケースということで、今年度、東京都、私どものほうで行う事業がありますので、これを仕組みのテストケースとして位置づけてみたいということで考えたものでございます。まず、１０ページ目がウェブシステムのところを、今回、ポータルサイトをつくってみようということで考えております。

当初はポータルサイトをつくってボランティア情報をお持ちの団体さんのリンクも張って、ここに来ればボランティア情報がありますよというようなシステムをつくろうと思っていたのですが、せっかくここで議論していただいているので、例えばウェブ用のコンテンツの作成というところで、ボランティアでどういうものですというよりは、ボランティアって楽しいですよとかという体験談的なものを載っけたらどうかというところで、これは、あと予算上の問題とかいろいろあるのですけれども、著名人が出すことで、それが広がっていくのか、もしくはほかの一般のボランティアをやった方々の体験談も一緒にセットで出すことで、もっと口コミ的に広がり方があるのか、今までちょっと興味があるけどという人が次につながっていくのかということを１つのコンテンツとして出してみたらどうかというところがあります。

それから、既存の、都で今までやっていましたけれども、「ちょいボラ」というのがありまして、ボランティアということは、例えば１日かけてじっくりやるのではなくて、ほんとうに空いた何十分でもいいから、ちょこっとボランティアやってみませんかというのをちょいボラとして広めているところがあるのですけれども、そういうような事例とかもここに載っけていくというのと、あとはボランティアの関連サイトのリンク集というところで、こういうコンテンツを入れることで広がりが持てるのではないかということを考えているというところでございます。

それから、２番目としましては、ボランティア活動の気運醸成ということで、先ほどの広報のところ、これをウェブを使ってＰＲということで、ボランティア気運につながるようなＰＲをやっていけないかということを考えているというところと、あとは、２番目としてはシティキャストに関しては、これからいろいろ活動、研修等々行っていくのですけれども、今、メルマガをシティキャスト向けに出しているというところがありますので、こういうところとの連携といいますか、コンテンツも考えつつ、次につながるような取り組みができないかということを考えています。

あと、３番は、先ほどのボランティア体験談に近いのですけれども、体験談等、どうフィードバックしていくのか、ウェブ上でどういうふうに広めていけるのかということも、

このポータルサイトの中でテストとしてやってみたいなということを考えているというところでございます。

それから、１１ページをごらんいただきたいと思います。こちらに関しましては、実際のイベントというところで、私どもで講座をやっております「外国人おもてなし語学ボランティア」、こちらは２０１５年からスタートさせて、都民、昼間都民といいますか、在勤、在住、在学の人であれば受けられるということなのですけれども、１人１回しか受けられないという縛りをつけさせていただいていますので、実は２０１５年の人は、もう４年前に受けてそれっきりという、活動している人は活動しているんですけれども、そういう人たちのモチベーションをどう維持していくのかということを考えて、このイベントをやるのですけれども、そのために、せっかくおもてなし語学ボランティアって、フィールドキャストではなくてシティキャストとほぼ似たような活動をしていただいている。それを枠の中ではなくて、一般の町中でやっていただいているというところもありますし、年齢層的にも近いものもあります。というところもありますので、このイベントを今回のこの仕組みの中のイベント的な形でどこまでやれるのかということをテストとしてやってみたいと考えているところでございます。

日にちに関しては、２月１１日に東京国際フォーラム、有楽町の前の。そのほうでイベントを行います。ここでは、おもてなし語学ボランティアの講座の中を振り返ってもらって、もう１回モチベーションを高めてもらう、意欲を高めてもらうというところもやりつつ、ボランティアさんによる活動の発表をやってもらうことで次の、今まで活動していなかった人に活動意欲を持ってもらえるかどうかというところもありますし、あとは、例えば道案内とか電車の案内だけではなくて、ちょっと目先を変えたような、例えば日本の文化を紹介する、伝統文化的なものを紹介するというところで、今、いろいろとあちこちでやっています風呂敷みたいなものの活用方法ですとか、風呂敷を外国人に紹介するようなところを１つこの人たちにも担ってもらうことで、違った視点を持ってもらえるのではないかということも考えております。

あとは、この方々にまた違う分野に目を向けてもらうためにどうしたらいいかというところで、例えば若干似てはいるのですけれども、多文化共生の世界です。在住外国人が東京でどうやって生活をしていけるか、日本の中で困らずに生活をできるかという、生活の部分というのも入っていくのですけれども、そういうようなボランティア団体さんとか、ボランティア情報を紹介することで地域のほうにも目を向けていけるような取り組みとい

うものも、このイベントの中で少しやってみようかなと思っております。この仕組みのほうの中身が少しわかりづらいかなとは思うのですけれども、こういうようなテストをすることで、より深みを増していけるといいますか、現実味を持たせていければなと思っているところでございます。

以上でございます。

市川座長

ありがとうございました。

最後のこの外国人おもてなしフォーラムって、何人ぐらいを想定しているんでしたっけ。

山﨑地域活動推進課長

２，０００人ぐらい。

市川座長

２，０００人ぐらいの規模のもの。今までの関心から、それぐらいは集まるだろうと認識していらっしゃるようでございます。

では、これのケースについて、仕組みについてご意見がおありでしょうか。どうぞ、ご意見をいただければと思います。特にウェブサイトとか、こういうモデルが出てきまして、これはたたき台として皆さんのご意見をいただきながら修正していくようになるかというふうに、都がやれという議論ではなくて、たたき台を出しているので、皆さん方、これに乗れるのか、不十分なのか、難しいのか、いや、これは評価できるのか、少しご意見を伺って、皆さん方のいわゆる所属の団体からも言えるかどうかをご検討いただければと思いますが、いかがでしょうか。どうぞ。

渋谷委員

部会のメンバーなので皆さんより早くこの情報を把握しているのですけれども、皆さんが考える時間を稼ぐ意味で私から先にご意見したいと思います。ウェブサイトのコンテンツ関係、１つ目、著名人等のボランティア体験談のところ、先ほど山﨑課長が、著名人がいいのか、等身大の誰でも、あ、これなら僕でもできるんだと思わせるような一般の方がいいのかというご指摘がありましたけれども、私は両方セットにするのがいいなと思って

います。私たちの日本スポーツボランティアネットワークの中で、今、活躍する人たちというところでやっているのがまさに、誰も知らない人たちをずらっと並べていると、目につきにくいというところがありますので、元アスリートで著名人も入れたりしつつ、だけど、できれば、こんなに簡単に手軽にできるんだと思ってもらえる一般の方のインタビューもあわせて掲載するというような形でやっておりますので、参考にしていただければなと思います。

あと、ボランティア関連サイトのリンク集というところなのですけれども、当面はこれでいいのかと思うところもある一方で、この仕組みの全体像の話になったときに、この真ん中のシステムがちゃんとシステムとして機能する上で必要なのは、ボラ市民ウェブさんであるとか、私たちのスポーツボランティアネットワークのスポボラネットとかに、ここで知った、リンク集を通じてここで知ったら、そっちのページに行ってしまうのでは意味がないと思うんですね。より多くの人により届ける上でのシステムでなければならないとすると、どんな工夫が必要なのかなということは少し考えたところで、ボラ市民ウェブさんの結構、講座情報とか見ると、かなり私などの目だと魅力のあるクオリティーの高いものがずらずらっと並んでいるんだけれども、たまたま一般の目に触れていないから集客が図れていないものがたくさんあると思うんですね。そういったものを見せてあげる役割をこのシステムがするといいのではないかなと思いました。

あともう１点だけ。ウェブサイト、シティキャスト向けの配信コンテンツの作成というのがあるのですけれども、これは外国人おもてなし語学ボランティア向けにも同じ情報を発信する前提なのか。同じというか、同じではないと思うのですけれども、おもてなし語学ボランティア向けにも当然配信はするという前提でよろしいですよね。

山﨑地域活動推進課長

はい。

市川座長

そちらから何か意見ある？

山﨑地域活動推進課長

ありがとうございます。外国人おもてなし語学ボランティアの人には、実はその専用の

ページをうちのほうで別に持っていまして、ごめんなさい、説明しませんでした。シティキャストについては、うちの立派な事務局、オリパラ局のほうが出しているのですけれども、同じ情報は、そのおもてなし語学ボランティアのウェブの中でも紹介するという形でやっています。

市川座長

ということは、今までの議論は、それぞれの例えばホームページに飛んでいく、もしくはこのネットワークのホームページに飛んでいくというような方向とともに、ここの内部でも少しそれによって、コンタクトしたことによって得るようなことが描けないかということですね。そこもどうぞ具体的にご助言いただきたいと思います。

どうぞ、高橋委員。

高橋委員

共助社会づくりを進めるための検討会って、この共助社会づくりがよくわからないというのがあるのですけれども、オリパラで楽しくやりがいのある、また、自分のためにということの、そういう誘いとしてまた次の活動につなげるというのはいいと思うのですが、その後の、先ほどの魅力あるコンテンツはいろいろあるとおっしゃっていたのですが、地域課題とか、そういう本当になかなか難しいところまで、どこまで行けるのかというところにジャンプする、言葉としては本当にジャンプするような感じだと思うのですけれども、そこのところの仕組みがこの仕組みのところでいけるのかどうか。その仕組みの中にこのコーディネーターのことが、さっきは議論がありましたけれども、そういうものがない限りなかなかそのまま気づいて関心を持ったり、理解をしたりして、それで活動につながるところまではなかなか行かないかなと思っていまして、そこのところの仕組みを何かかませる必要があるのかなと思いました。

市川座長

ありがとうございました。

共助社会といった報告書は以前出ているのですけれども、そこにおいても多様性と共生、共に生きる社会づくりだということ、両側面を入れて議論していて、多様性というところでは、ボランティアもいろいろな多様があるだろう、多様性が。そこから徐々に、徐々に

今いろいろな地域の問題に行く人もいれば、また、全ての人にそこに行けということはちょっと難しいから、いろいろな参加を通しながら出会っていって、ある意味で社会を変えようとする人もいれば、やっていて楽しくて、しかし、それがほんとうにものすごく大事なことで、精神的障害を持たれている方のサロンで食事をつくるのがほんとうにうれしいとか、そういう方もボランティア、いろいろな方たちが行けるような多様性をこれ、見つけようかという議論まであるんですよ。

ただ、今おっしゃったようにジャンプ、行くという、そこら、アイディアをください。ジャンプ、行けるかねという。全ての人は行けないと思うんですよ。行く人は最初から、そう思っているかもしれないし。だから、生活困窮でも、障害の方が多かったり、パラリンピックを経験してそれに行く人もいるだろうし、そこら辺、ちょっとアイディアをくださって、この内容は、コンテンツを深めていかなくてはいけない。これは大きなテーマなので、ご助言いただければと思いますが、ほか、いかがでしょうか。どうぞ。

小原委員

この図の黄色いネットワーク（ボランティアネットワークシステム）をうまく回していくに当たって、やはりこの７ページのオープンなネットワークの資料と対比しながら回る仕組みにしていかなければいけないんだろうなというのは強く感じているところです。この７ページのところで見て、ＩＴを活用したネットワークコミュニティというのと、イベントというものの対比の中でもはっきりと違っているのは、ウェブの上に載るものと載らないものがあって、そのウェブの上に載るものというのは、もうデータ化された記号しか載ってこない。それに対してイベントは、その記号化できないフィジカルなものも含めた体験に基づく喜びみたいなものは、やはりイベントのサイドからしか手に入らない、というのをやっぱり重要視していかないと、あの黄色いネットワークは回らないのではないのか。

そうしたときに、黄色いネットワークがうまく回っていくときの鍵はやっぱりイベントだと思いますし、そのイベントに対する７ページ的なつながり・連動がしっかりしているからウェブシステムというのはイベントに向けて盛り上がっていくのだと思いますし、そういう盛り上がりが幅広く参加者を集める上で、広報というのは間口を広げる役割を果たす。それらに対して、どこの誰がやっているのかわからないという話にならないように安心感を与えるのは顕名、明らかに名前をさらしている協議会としての存在なのだというこ

とだと思います。そうとしたときにあの図は、実は私は学校の立場を代表してここに来ているので、学校がそのネットワークにどう入るのというのは、あの図だけからは見えないところに問題はあると思います。ほかのプレイヤーは、黄色いネットワークに対してどういう立場で参加するのかというのが比較的クリアです。

それに比べて学校は、先ほど吉田事務局長がリテラシーという言葉を使ってくださったことで、私、はっきり自覚できたのですけれども、ボランティアの受け皿として学校が存在すると同時に、生徒たちをボランティアの人材として供給する側にも立つ。言ってみれば、６ページの図で言うところの個人・グループ・団体のソースであると同時に、組織・団体――同じか。要は丸いのとおうち型、両方に学校はおさまってしまうので、ボランティアに関してどういう立場で今振る舞っているのかということと、それに関してどういうふうに進めていくのが適切なのか。言ってみればボランティアリテラシーというものが、それぞれの立場で整理されて、こういうリテラシーを身につけると参加したときに主体的に動いていけるのだというのが整理されていて、その情報が提供されれば、その情報をちゃんと伝えて、どっちの立場でも、そのタイミング、そのタイミングでのボランティアリテラシーというものを発揮して、あの黄色いネットワークに参加するポジショニングが取りやすくなるのかなと思いました。

以上です。

市川座長

その点は、現場の杉渕委員はいかがですか。

杉渕委員

そのボランティアリテラシー、大賛成ですよね。そういうもの、やっぱり生徒たちも事前学習とか事前の準備というのはすごく大事でして、それを持ってやるからほんとうに学校では学べない社会体験ができますので、その辺の仕組みは大事だなと思っていて、あと、少しまた変わりますけれども、生徒はウェブとかからの情報をすごく身近に感じますので、何かイベントに参加したり、自分がボランティアをした後に、それについての、何か書き込みみたいな、うれしかったとか、助かったとかというのを、それを見ると、とてもまた喜びます。そんなような何かが後から、参加者の声が聞けるようなものもウェブを通してできるとまたそれもいいかなと思います。

市川座長

ありがとうございます。

どうぞ。

小原委員

１点補足させてください。参加する立場も４ページにあるような関心というのが、入り口は左の下から入ってくることが多いのだと思うのですけれども、そこで得られた実感によって、この中でいろいろなところに遷移していくのだと思うんですね。ですから、参加する人の関心が遷移することも含めた、そこに対応したリテラシー、左の下も関心を中心にしている人が、どっちに向かってシフトしていくのがふさわしいのかというものを誘導するようなリテラシーの体系みたいなものが整理されてくると、事前学習のときにまだこの子は入り口の段階からこの程度のリテラシーだけれども、この子はもう何回か参加しているから、次のステップに進んでいいんじゃないみたいなことも押し出してあげる側としてはやりようがあるのかなと。

あと、先ほど校長がおっしゃられたように、子供たちは参加して喜ばれることが次の参加に向けたすごいご褒美になるんですね。実は裏返して言うと、その受け皿側としてみれば、感謝をはっきりと外に向けて表明するというのは、受け入れ側のリテラシーの最たるものだと思うんです。コーディネートしてくださっている方々とやっぱり受け入れ側とでは知見が全然違うので、やっぱり来てほしいな、受け入れ側になりたいなという方にも、そういうリテラシーというものが整理されて伝えられることによって、そのコンテンツを作り込むハードルが下がるのかなと思います。

市川座長

今見た７ページで専門家、経験者、専門性の高い初心者とか未経験者という１つの体系になっているけれども、もう一方、それが初心者から経験者になっていったりとかいう、その人の成長プロセスを少し追ってみるというのも１つのやり方だと思います。

それともう一つ、スクールボランティアサミットってあるじゃないですか。７月にやるサミットと都庁が今やっている同じ名前ですが、サミットがあって、それぞれいろいろなところで実際の活動を報告していますよね。それは僕も基調講演をさせていただいて、す

ごく勉強になったんですけれども、そこでやっぱり重要なのは、少し確認をおかなくてはいけないのは、全部の学校を全部、都庁だから、校長会だからということで全部のことを、責任を負うことはなかなか、校長の考え方も違うし、前向きな校長もいるから、ここは前向きじゃない校長とか、前向きな校長とか分けて、駄目な校長はどういう性格かとか、そんなこと言えないから、だから、ある意味で１つ先駆的な可能性を、全体は難しいけれども、前も奉仕活動というのを位置づけてやったけれども、いろいろ奉仕活動が、いや、ちゃんときっちりやったところと、周りの掃除で終わってしまったところとか、いろいろあったじゃないですか。

なかなか行けないので、行きやすいような仕組みをご助言いただけませんかね。皆さん方が。全部やれといっても、強制ではなかなか動きにくい。そういうときにはやってみて、ああ、こういう資源を使えたらやれるなとか、そういうことが仮にあるならば、あるのだと思うんですよ。いい校長が来て、いい悪いではなくて、関心がある校長がいるところ、結構やっていますよね。そういうようなことを少し参考に動ける、ある程度、上意下達じゃなくても動ける仕組みを少し提供すると、それぞれのところで、例えば社協と連携したらいいかとか、企業とこうやるから、企業と連携したら授業をやってもらえるよとか、そういうハウツーを伝えることの意味もあるのかなということをこの１０年、２０年近くずっと考えています。なかなかうまくはスムーズに行かないので、そこら辺もこのところで可能かどうか助言していただくと、とてもまとまりやすいと。やってもらうと思うな、やりたい気持ちになってもらうというような仕組みを少しここで考え、入れ込んでいかなくてはいけないのではないかと思いますけれども、ありますか。

鈴木委員、どうぞ。

鈴木委員

今のお話を聞きながら、子供たちがいろいろな体験をし、ありがとうと言われる経験は、とても大事だと私も思います。しかし一方で、私たちは、サマボラなど、夏休み期間に、小学生の子供たちもボランティア体験を施設するんですね。実はそこでは、反対に施設側が子供たちを育ててくれる、体験させてくれているという反対のありがとうもあり、お互いさまというのをやっぱりボランティア活動の中でとても大事なことだと思うのです。子供たちにありがとうも大事ですし、受け入れてくれた施設や受け入れてくれた当事者の人たちも、実は子供たちを育ててくれてありがとうという、双方のお互いさまが基本になる

のだと思います。

一番大事なことは、日々の学習の中でお互いさまという人間関係を友達同士で持てることだと思うんです。一方的に弱い人に、できる人が何かしてあげるという関係ではなくて、お互いに学び合う場であってほしいいと、私たちは福祉教育を取り組みながらいつも思っています。そして、いつも子供たちに関わっている先生たちから、子どもたちに伝えていただけるとうれしいなと実は思っています。

市川座長

それは企業にもよるし、いろいろなところに言えることで、可能性を秘めているから、学校は。子供たちの成長も含めて。ですから、そういう連携がとれればいい。実際、やっていらっしゃるけれども、実際やっている、見ていますけれども、でも、そういう可能性をそこに埋め込みたいということで、また改めて出していただければと思います。

ほか、ありますでしょうか。よろしいでしょうか。いい意見、小原委員も、杉渕委員もありがとうございます。これなんか、希望が見えてくるような気がいたしましたけれども、皆さん方のところで、またこれをまとめていきますので、ご助言いただいて、さらに精査していくということになるかと思いますが、この後、調査、アンケートをしたその結果について説明ください。

山﨑地域活動推進課長

最後につけさせていただいています、Ａ４横で何枚かまとめさせていただいております。お忙しい中、ご協力いただきましてありがとうございます。なかなかわかりづらい部分もあったかとは思いますが、趣旨的にはこれを受けて、中身をご説明するよりも、皆さん持ち帰って見ていただきつつ、せっかくここで集まっていただいておりますのでという思いもありまして、まず皆様方がどういう取り組みをされているのかというところがなかなか共有できないかなというところもあって、まずこのアンケートを取らせていただいたというところでございます。

１点だけ、ＮＰＯセンターさんのほうがなかなかうまく適応しない部分がありまして、保留という形で書かせていただいているというところがございます。個々に入っていると時間がかかってしまうので、一応、アンケートの趣旨としてはそういうところでございました。

市川座長

ありがとうございます。

ここは皆様方のそれぞれの可能性をネットワークしたいと。それぞれ共有して共同の歩みができないかどうか、だから、多様な方たちが参加してくださって、その基礎データとなるところですから、ある意味で柔軟に議論していただければ。

ここで改めて、時間が限られていますが、要するに私の趣旨は、みんなそれぞれの特性があるし、強みもあるし、弱みもあるだろうと。それをこのテーブルで合わせて１つの連携がとれないだろうか、そしてそれがより広い翼になれば、広い輪になれば、やろうという気持ちになっていただける方もいるし、その方の情報提供になるだろう。それがこの真ん中、さっきのやつの真ん中になるということの基礎資料でございます。

ですから、それぞれのネット、皆さん方のネットに張りつけますよね、基本的には。ここから飛ぶように色々していくけれども、じゃあ、中はどうしたらいいのか、飛ぶときには個別の議論をするか、例えば経団連とか、そういう１つのあれのネットに入っていったほうがいいんだとか、大学なら大学で、この間、東京都で大学のボランティアセンターの本をつくった、首都大学東京が入っていましたね。少なくともあそこのメンバーのネットに飛んでいけるとか、また、協力して依頼するとか、さまざまな可能性を模索しないと、残念ながら広がっていかない。そして、くどいようになりますけれども、いろいろなところで計画を立てたり、実際に見ていて、やっぱり地域はちょっと厳しいです。

いろいろな問題があって絆が切れているから、それを今回オリパラで得た人たちにも参加していただかないと、もうこれから増える見込みはないので、どんどん活動が潰れていってしまったり、いろいろな形で実績がなくなってしまう。そうではなくて、もう一度共生、共助社会をつくるためにこれを出して、そして可能性を模索しようということでありますので、どうぞこれをご協力していただき、また書き加えることがあれば書ける範囲で書いていただき、そして、もしもそこで課題があるならば、課題がこうありますということで明記していただきながら、これ、みんなで共有して、そしてどういうことが可能なのか。新しくつくらなくてもいいんですよ。あるものを活用して、さらにバージョンアップすればいろいろなネットワークができますので、それを考えたいと思っておりますので、ぜひぜひご協力をお願いしたいと思います。

そろそろ時間になりますので、事務局のほうから何かありますでしょうか。

山﨑地域活動推進課長

ありがとうございました。本日いただきました議論も含めまして、この後また部会のほうで中間のまとめの作成に入っていきたいと思います。部会において中間のまとめ、ある程度形ができた段階でまた検討委員会のほうで図って完成という形に持っていきたいと思っています。あくまでも今回は中間のまとめですので、最終案に向けた途中経過というところでございますので、これが完璧ということではない中ではありますが、一定程度の方向性が示せるかなと思っています。部会のほうの方にはまだ話していないのですけれども、一応、１０月中を目途に中間まとめをつくっていきたいと思っておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

この後にまた専門部会を開催させていただきますので、この後、部会の委員の方はそのままお待ちいただければと思います。

市川座長

ありがとうございました。

１０月中を目指して進みますということですから、どうぞご意見を寄せてください。そして皆さんでつくる、納得いくネットワークをつくるということが次のチャンスになると思いますので、どうぞよろしくお願いします。

山﨑地域活動推進課長

１点いいですか。先ほど皆様方の、今、現状のアンケートをさせていただいた後に市川座長からもありましたように、この後、このシステムをどう使えるかというようなことについてまたアンケート、後で出させていただきますので、ご協力をお願いしたいと思います。

あと、検討会のほうなのですけれども、中間のまとめを完成させるに当たって皆さんにお集まりいただいて、検討委員会という形をさせていただくことは思っておりますが、１０月中で時期も近くて、皆様方、なかなかお忙しいというところもありますので、その開催方法についてまた座長のほうとご相談させていただいてという感じでよろしいですか。

市川座長

特に書類裁決というか、書類で原則は行こうということを考えておりまして。また集まるのはかなり難しいですよ、このメンバーがね。日程調整がすごく難しいですので、それをやりながら、必要と思われるときには確認の委員会を開くということにさせていただきたいと思います。よろしいでしょうか。

では、馬神さん、どうぞお願いします。

馬神都民活躍支援担当部長

本日も限られた時間の中で非常に活発なご意見をいただきまして、どうもありがとうございました。何度も出てきたように、これ、ボランティア、共助社会って、先ほどあったお互いさまじゃないですけれども、本当にその考えの中でつくっていくものですので、今回、東京都の持っている中で色々つくらせていただいたのでは、とてもとても通用するものではないなというのが、議論すればするほどわかってきたというところでございます。限られた時間ではございますけれども、皆様のお知恵をかりながら、皆様にとっても使いやすかったり、ご自身の活動をもっと活発にしていくために何か役立つようなものをつくりたいと思いますので、どうぞご協力、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

市川座長

これをもちまして委員会は終わります。どうもありがとうございました。

―― 了 ――